

聖書箇所：第一サムエル記 30章 1～10節  
説教題：必ず救い出す

## 1 泣くダビデ

前回のところを少しふり返ります。イスラエルとペリシテ人との戦いが始まろうとしています。ダビデは難しい立場に立たされました。アキシュと一緒に戦争に出るなら、同胞を殺すこととなります。一方、アキシュの命令を拒否してイスラエルの側に就くなら、自分が殺されます。ダビデは神に助けを求めました。何が起きたか。ダビデは何をするかわからないと疑ったペリシテ人たちが、ダビデを戦場に近づけてはならないと言い出しました。こうやってダビデは危機一髪のところから救われていきました。きょうはその続きとなります。

ダビデが村に戻って来てみると大変なことが起きていました。男たちが留守をしていた間に、村は盗賊に襲われ、火が放たれ、妻たちや息子たち娘たちが全員連れ去られていました。ダビデのふたりの妻たちも誘拐されました。つい昨日までは大きな試練に立たされ、そこから救われてやれやれと思ったら休む間もなくまた大きな問題が降りかかってきました。

ダビデは六百人の軍隊を統率する指揮官です。女性や子供たちを含めれば、千人を超える集団のリーダーでした。リーダーたる者はどう振る舞うべきか。そう尋ねたら、おそらく全員がこう答えるでしょう。たとえ部下たちが動揺していても、リーダーはどつしりとかまえていなければならない。事態を冷静に観察し、適切な指示を与えていく、そう

やって群れをしっかりと導いていく。それがリーダーの理想である。

ダビデはどうしたでしょう。4節にこうあります。「ダビデも、彼といっしょにいた者たちも、声を上げて泣き、ついにはなく力もなくなった。」なんと、ダビデは自分のリーダーとしての立場を忘れてしまい、部下たちとおなじように声を上げて泣きました。世の常識から見たらリーダーとして完全な失格です。こんなことをしていたら部下たちが動揺してしまいます。

## 2 悩むダビデ

### (1) 怒りのはげ口

案の定そのとおりになっていました。部下たちは家族が連れ去られたことでしばらくは泣いていましたが、泣き疲れてくると次第にダビデに怒りをぶつけ始めます。この災難が起きた責任は誰にあるのか。怒りの矛先は、ダビデに向けられていきます。とうとう石で打ち殺してしまえという声さえ聞こえてきました。

なぜダビデに怒りが向けられるのでしょうか。愚かなリーダーに見えたから。確かにそれもありますが、もう一つある。

人は何かの不安に襲われたとき、なんとかして心の安定を取り戻そうとかがきます。リーダーにすべての責任を背負わせ、災難が起こったのはあいつのせいだと叫んでいきます。今の時代、リーダーが少しでも失敗すると、人々は徹底的に非難します。あるとき

は大臣の首さえ飛ぶこともあります。なぜそういうことが繰り返されるのか。心の内に耐えきれないような不安をかかえているからです。男たちは自分のうちにある不安を振り払うために、怒りをダビデにぶつけていきます。

この叫んでいる人たち、もともとはダビデの人柄をしたって集まってきた人たちです。ダビデは、そんな仲間達の思いに応えるために一生懸命努力してきました。サウルから追われていたとき、仲間を棄てて自分だけ逃げ延びることもできたのに、仲間を見殺しになどせず、むしろみなが無事に助かるようにと心を砕きました。ペリシテ人の地に逃げ込むと決めたのも、仲間達が生き延びられるようにと考えた結果でした。それだけのことを命をかけてまでしてきたのに、ダビデは自分の信頼してきた仲間に裏切られようとしています。

6 節に、「ダビデは非常に悩んだ」とあります。悩みがどんなものであったか、簡単にわかることではありません。おそらく、信頼した人に突然裏切られてしまったという大変な経験をお持ちの方でなければ、理解できないことだろうと思います。

#### (2) 神はどこにおられるのか

ダビデが苦しんでいるとき、主はどこにおられるのでしょうか。6 節の後半に「しかし、ダビデは彼の神、主によって奮い立った」とあります。今まで遠く離れていた神が、突然ダビデのところへやってきたということではありません。第一サムエル記 16 章 13 節にこうあるからです。「サムエルは油の角を取り、兄弟たちの真中で彼に油を注いだ。主の霊がその日以来、ダビデの上に激しく下つ

た。」

つまり、ダビデの行く所にいつも聖霊がおられたのです。この場面においてもそうです。

ここから何がわかるでしょう。神がともにおられたとしても、ダビデを見てわかるとおり、苦しみに遭うことは避けられません。時々、「神がともにおられるので、いつも平安です」とにこにこしながら言う方がいます。神がともにおられるこすとはそのとおり。でも、ダビデは悩んだのです。同じように私たちも悩むことは避けられない。神がともにおられるので、平安だとは簡単に言い切れないのです。

しかし逆のことも言える。時々、「信仰が足りないから悩む」とこぼす方もいます。そんなことはない。ダビデは、信仰があっても悩んだのです。自分は悩んでいるから信仰が弱いとか、そんなふうには思わないでいただきたいと願います。

### 3 苦難の時に

#### (1) エポデ (出エジプト記 28 章 6 節以降)

ダビデは祭司エブヤタルに命じてエポデを持ってこさせます。エポデとは何か、その詳細は出エジプト記 28 章に詳しく説明されています。神の前に出るときに祭司が着る特別な服です。エポデの役割については、出エジプト記 28 章の最後にこう書かれています。「彼らが咎を負って、死ぬことのないためである。」

ということは、ダビデがエポデを持ってこさせたのは、神に近づいても死ぬことのないようにという配慮からだったということになる。言い換えれば、それだけダビデは追いつめられていたということです。

## (2) 誰が救い出すのか

エポデを身につけて、ダビデは尋ねます。「あの略奪隊を追うべきでしょうか。追いつけるでしょうか。」神はお答えになりました。「追え。必ず追いつくことができる。必ず救い出すことができる。」

ここでよく注意していただきたいのですが、誰が救い出すと言っているのでしょうか。9節以降を読めば、ダビデと六百人の部下が救い出しに行きますから、「全員の協力で救い出す」と思うかもしれません。ところが、8節の神の答えはこう訳すことができます。「あなたは必ず救い出すことができる。」「あなたがたは」ではありません。「あなた」と語っています。連れ去られた家族を救い出していくのはダビデ、おまえなのだと言は語っておられる。これはいったいどういうことでしょうか。

## 4 イエス・キリスト

### (1) ともに泣いてくださる

いつも繰り返しますが、ダビデはダビデの時代からおおよそ千年後に来られたイエス・キリストの姿を現しています。ダビデがここで何をしたかももう一度ふり返ります。

ダビデは、家族が連れ去られた仲間達と一緒に泣きました。ダビデが無傷であったわけではありません。ダビデもふたりの妻を失いました。

イエス・キリストはどうされたか。この方も、悲しむ者たちのところに出向き、一緒に涙を流されました。安全なところに立って泣いたわけではありません。この方は傷ついていわれます。

### (2) たとえ打ち殺されても

悲しむ人たちを助け出し、救い出すという奇蹟を起こすたびに、この方は人々から怒りをぶつけられていきます。イエスをねたんだパリサイ人たち、律法学者たちにいのちを狙われ、最期は十字架に追いやられてしまいました。

真のリーダーならば、涙を流してはならない。どんなことがあっても毅然としていなければならないと世の常識では言われています。イエス・キリストはそんな常識から見たら失格者に見えてしまいます。悲しむ者とともに悲しまれます。その結果、ひとびとの憎しみの的となり、怒りをぶつけられていきました。

### (3) 必ず救い出すために

どうしてもととうまく立ち回らなかったのでしょうか。人前で涙を流しておろおろ泣くようなことをしなくてもよかったはずではないか。こんな言い方がふさわしいとは思いませんが、私にはこのような言い方しかできません。「神は、苦しんでいる私たちをご覧になると、おろおろ泣いてしまう。泣くなと言われても止めることができない。」このように泣いて下さるから、やもたまず「必ず救い出さなければ」と突き動かされていくのです。

ダビデは軍人です。いろいろな修羅場をくぐってきた人です。ちょっとやそっとのことと右往左往するような人ではない。後にイスラエルを治めるほどの器となった人です。しかし彼にはリーダーとしていくつかの欠点がありました。悲しいことがあれば人目ばかりなことなくおろおろと泣いてしまう。またうれしいことがあれば、人目かまわず裸踊りをしてしまい、妻からも軽蔑されてしまう。心が感じるままのことをそのまま素直に表

現していった。そういう人でした。

人々の目には愚かに見えたダビデの姿。しかし、神の目にはそうではありません。イエス・キリストもそのような方なのです。この方は、私たちが苦しんでいるのを黙って見過ごすことができません。心の底から悲しみ、涙を流されます。そして居ても立ってもいられないようにして、こう言われます。「必ず救い出す。」ほかの誰かがするものではありません。神はダビデに対し、「あなたが救い出す」と言われました。救い出すのは、私たちではない。イエス・キリストお一人がそうされます。

主の救いの確かさを覚えて御名をあがめます。